

‘わんりい’172号をパラパラとめくってすぐ目に入ったのが、寺西俊英さんが書かれた「中国・城市めぐり〈长春市そのⅡ〉」だった。昨年の9月、私も長春を訪ね、同じような場所を訪れたからである。中に入れなかったが、旧満映の「長春電影制片廠」の正面入口にも立った。しかし長春には何度か行ったが、残念ながら未だに旧満映の中を見たことがない。

それだけではなく、寺西さんの記事に目が留まったのは甘粕正彦と大杉栄の名前があり、懐かしい思い出が蘇った。

🚩大杉栄に魅かれた私

1960年代の半ばに大学のキャンパスを踏んだ私にとって、大杉栄はとりわけ魅惑的な響きを持っていた。当時は60年安保の熱気が冷め、68年の全共闘運動が盛り上がる前の、いわば谷間のような沈鬱な時代である。

それでもマルクス主義が幅をきかせていた時代だ。相変わらず、学生運動の主流は圧倒的にマルクス主義が思想的な支えになっていた。各派そろって5派8流なる政治諸党派が乱立する時代である。といっても多くの学生は、いわばノンポリ。「一般学生」は圧倒的に政治的には無関心層だった。

そんな少数の政治諸党派でさえ、マルクス・レーニン主義を奉じている。当然にも前衛党史観を抜け出せない。後生大事に組織重視である。どちらかといえば自由な雰囲気に関心する私は、そういう組織とは最終的には肌が合わず、アナキズムに惹かれていた。時はちょうど、戦後初めて大杉栄の全集が開始した頃だったと思う。

その前の高校時代から、今も存在するのかわからないが、日本アナキスト連盟の会合にも出ていたこともあった。大杉栄にはその奔放な行動力に魅了されただけでなく、自由恋愛主義なる「フリーラブ」思想にも魅かれていた。と言っても当時、恋人がいるわけではなく、まあ夢想の域をまるで出ない青年である。

大杉のことを調べていくと当然にも、甘粕正彦の名前が出てくる。大杉を殺した〈下手人〉としてだ。甘粕に対していいイメージなど持てるわけではない。

🚩多くの人々に慕われていた甘粕正彦

ところがそれから5年ほど経った頃だろうか。なんとか社会に出て禄を食んだ道は、週刊誌の記者だった。当時発行部数がトップを誇っていたサラリーマン向け週刊誌の雑多な取材に追われていた私に、「あの甘粕正彦は本当のところ、大杉を殺していない」という話が飛び込んできた。これは面白い。事実なら衝撃的なスクープだ。特集記事になるのではないかと何人かと取材に当たった。

取材するうちに「甘粕会」という会があることがわかった。旧満州で甘粕正彦に接した人たちが、甘粕の人柄に惚れ込み、甘粕亡き後も甘粕を慕って仲間たちが集まっているというのだ。

その一人に今は亡き武藤富男氏がいた。当時、明治学院の院長ではなかったか。キリスト教新聞社の社長でもあったと思う。

武藤氏は、「甘粕は大杉を殺してはいない。殺すような人ではない」という。跳ね上がった軍人の一部が犯した罪を一身に背負い、甘粕が身代わりに出頭したというのだ。

調べてみると、それを匂わせる、ねず・まさし氏の現代史の研究書もあった。事件はことによると、軍属だった秩父宮殿下にまで事が波及するとまずいという、軍上層部の意向で甘粕が罪を背負うようになったらしい。その研究書はそう書かれていたように思う。

しかし、取材しても「大杉殺し」ではないという決定的な証拠は出てこないで、この企画は没になってしまった。

40年ほど前の取材体験だが、今でもはっきりと脳裏に残っているのは、甘粕を知る人たちが、本当に甘粕に惚れこんでいるということだった。

🚩「書かれた歴史」は真実を表しているだろうか

その後、週刊誌記者をやめた後でも、甘粕と書かれた書物が出るとすぐ買い求めてしまう。角田房子氏の『甘粕大尉』（初版1975年）、近年では佐野眞一氏の『甘粕正彦 乱心の曠野』（初版2008年）である。この2つの著書を読めば、甘粕の「大杉殺し」下

甘粕正彦と大杉栄

大類善啓

手人説には疑問を持つだろうと思う。

今回この原稿を書くために、取材時に武藤富男氏から贈呈された『満洲国の断面』という著書を何年ぶりがで開いてみた。奥付を見ると、昭和31年9月10日となっている。昭和31年といえば1956年だ。「一九七一、七、二四、大類兄 武藤富男」と署名がある。発行されてから15年も経っている。武藤氏自身も、手元にもう何冊も持っていなかったのではないか。その貴重な1冊を贈呈してくれたのだ。中を開くと、もう字が薄れるほど古く茶色に染まっていた。取り出してみると表紙が剥がれてしまった。その表紙をよく見ると、小さく、「甘粕正彦の生涯」というサブタイトルがついている。当時、すでに絶版になっていたはずだ。もう「幻の書」かもしれない。何度か引っ越しや家の改築などで書棚にあった書籍はほとんど古本屋行きになったが、この書だけは手放さないできた。

「『人殺しが、満洲国の政治に関係するとは何といういやなことであろう』と私は思った」というのが本文の冒頭の文章である。当時、国务院法制処(法制局)の参事官をしていた武藤氏が、満洲帝国協和会の総務部長として甘粕が来るというニュースが入った時の感想である。その武藤氏は甘粕と接するうちに、「このような教養の高い人がそんな大それたことをしたのだろうか」と初めて、大杉事件について疑問を持つのだ。

「私の好きなのは悪源太義平です。彼は人のために尽くして損ばかりしている」「歴史の本に書いてあることはあてになりませんよ。歴史に記されたことと真相とは全くちがうことが、しばしばあるのです」。武藤氏の耳に残っている甘粕の言葉である。

武藤氏以外でも甘粕を慕う人たちは、「甘粕は大杉を殺すような人ではありません」と言って、その人柄を褒め称えるのだった。

角田房子著『甘粕大尉』によれば次のようなことが書かれている。

軍事法廷で甘粕の弁護人が甘粕に向かって、「あなた(甘粕)の母親がくあんなに子どもが好きな正彦が、子どもを殺すようなことはできません。正彦よ、どうか、このことだけは真実を言ってほしい」と訴えている」旨を話し、真実を述べるように促す。しかし甘粕は、すでに私は母を捨てていること、そして無意識に子供を殺したと述べる。この言葉を聞いて二人の弁護士は、「この法廷は陛下の名において行わ

る神聖なものだ。もう一度考えなさい」と迫った。

弁護士は甘粕に熟考の機会を与えるため、10分間の休憩を申請し、法廷はその要求を受け入れた。そして法廷は再開された。甘粕はしばらく沈黙の後、「・・・実際は私は子供を殺さんのであります。菰包みになったのを見て、初めて知ったのであります・・・」

こう言うと甘粕は、法廷にいる誰もの目が彼に注がれていることも忘れたかのように、顔を覆って泣いた。

甘粕はこの母親の気持ちを思い、大杉の甥の橘宗一という6歳になる少年だけは殺してはいないと、前言を翻したのだ。

墓場まで秘密を持って行った男

当時、やっと探し当てた甘粕の娘である甘粕和子さんにお会いしたが、彼女は私が記者であることを明かすと、一言も喋ろうとはしなかった。私はその気持ちが痛いようにわかり、黙って引き下がった。

甘粕はどこかで「本当は、俺は事件など起こしていないんだ、わかってくれよ」と誰かに言いたかったに違いない。普通の人間なら、どこかでそんな言葉を漏らすはずである。しかし決して口には出さなかった。だが、満映の理事長だった時代、酒席で酔いが回ると、あの教養があり紳士だった甘粕が突如、机をひっくり返すなど手におえないような行動をしたという事実は、なによりもその胸中の苦しさを表してはいないだろうか。

大杉栄はアナキストとして、また自由恋愛主義者として、本当に好きなように生きた。その生き方は今、改めて知識人から脚光を浴びている。

片や甘粕正彦は、本当に言いたかった〈真実〉を一言も告げずに死んでいった。その人生を思うと、肅然とせざるを得ない。

(おおるい・よしひろ：『日本と中国』編集長)

『日本と中国』は(社)日中友好協会が、編集・発行するしんぶんです。恐らく何らかのきっかけがあったのでしょうか。会報「わんりい」を『日本と中国』編集室にお送りしていました。この度、寺西俊英さんの「中国・都市(都市)めぐり/長春市」の内容が編集長である大類氏の目に留まり、当原稿を頂きました。文字通り市民サークル以外の何ものでない会の会報にお目を通し頂いていたことを知り、尚原稿まで頂きましたことを深く感謝申し上げます。(田井)